

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 4

昆布の煎じ方知らない???

鹿島釣狂



岩見沢釣遊会第3回大会

☆開催日	平成16年6月20日
☆開催場所	歌別川～岬港
☆入釣場所	東歌別
☆潮	満潮 03:28 148cm
	干潮 10:58 16cm
☆釣果	アブラコ 412 mm 4
	カジカ 315 mm 1
	重量 348 0g
☆成績	合計点数 1075 点
	成績 準優勝
	持ち点 2 点
	累計点 54 点 (250②)

喪明け

南西諸島で大型台風6号が発生し、大会日前日には高知県足摺岬に押し寄せ、怒濤渦巻く高波がテレビ画面で放映されていた。そして、波を見学しようと防波堤に乗った野次馬3名が、次ぎ次と海中に転落していく様も映し出された。折しも自衛隊のイラク派遣を巡って高遠菜穂子さん他2名の人質事件が勃発し、自己責任論が取りざたされていた時期である。人質事件の方はイラクへの人道支援や真実を明らかにするための情報収集という大義名分が立つが、防波堤上の野次馬については「危険を承知でそこに向かった」のだから「自己責任」は当然と言えば当然である。己のこととして自戒したい。

台風は2日後には北海道を直撃するとの予報で、僅かに大会日を外していたのが救いであった。当日の浦河地方の天気予報は曇り時々雨、南南西のち南南東の風弱く、波は1m、早朝には濃霧がかかるとある。

大会前に駐車場変更の案内が地図入りで事務局から送られてきた。今まで使っていた集合場所の駐車場が工事のために使えなくなり、事務局で新たに駐車場を用意してくれたのだ。新たな駐車場が飲食店街に近いこともあり、そこに愛車を駐車してから夕食をとることにする。ジョッキを注文し、一人で晴天と快釣を祈願してグラスを傾ける。時間に余裕があるため、日本酒にも手を染め、なんだか心地よくなってしまった。千鳥足で足下をふらつかせながら集合場所に着いた。

出発時刻が迫ったが、吉井氏、山岸氏の姿がない。大前事務局長に電話が入り、事務局で指定した第2駐車場ではなく同じ事業所の第1駐車場にいたということである。事前に地図が渡されてあったこともあり、ぼつの悪そうな様子で現れた。

嵐会長が親族の喪が明けておらず、その間の殺生は御法度ということで欠席した。私は、

父の49日法要が明けていないにもかかわらず参加することにした。父親が三途の川を渡りながら「お前は釣りが唯一の趣味だから、俺に遠慮しないで是非行ってくれ」と言っていると勝手に推測しての参加である。しかし、会長がいないとイマイチ張り合いが出ない。替わりにとっては何だが、仕事の関係が忙しくなり釣遊会を退会していた西川氏が参加してくれた。

バスの中では、私が前回の第2回大会に参加できなかったこともあり、その時の様子を指をくわえて聞くことになった。そして、今回の最干潮が午前11時過ぎになるので、役員で検討した結果、大会時間を1時間延長して11時上がりと告げられた。願ってもないことである。バスの中から見える日高沿岸は波が1枚程度で天気予報通り穏やかな釣りが出来そうである。

いつものごとく

0時、いつもの東歌別に到着し、私が一番のりで降りた。いつもの坂道を下っていくと、いつもは煩く吠えるセントバーナードの挨拶がない。舟揚場に付いた水銀灯に淡く照らし出された東歌別の海岸沿いには人っ子一人見えない。この広い海を自分が独占できるのかと思うとワクワクするが、一人となるとなんだか淋しい気持ちにもなる。

いつもの舟揚場で、いつものごとくドボンとやる。いつものように25cm程のカジカが来た。型は今一だが、ここには必ずカジカがいるので、2魚種を揃えなければならない審査にはうってつけである。時間ぎりぎりまで嫁を探して釣り歩くのは御免被りたい。

いつもはここにゴミは寄らないのだが、仕掛けにゴミが付く。しばらく放っておくと道糸にも流れたホンダワラや昆布が絡みつき、波の動きとともに竿が大きく引き寄せられる。さらに、竿を海中に引きずり込もうとするので気が気ではない。舟揚場近くにある大きな石を運んできて、竿尻に重石として置く。それでも気休めにしかない。竿尻によって持ち上げられた石が発てる音を頼りに竿に飛び付く。日高の幅広の昆布やホンダワラを引き連れてきた仕掛けを高い防潮堤の上にクレーンすることが出来ない。魚が付いていることも考えられるので、竿を揺すってゴミを滑り落とすことも出来ない。

1本のカジカだけで魚が全く来ない。満潮が3時過ぎなので、夜が白々と明けてきても潮がこんだままである。狙いの岩に乗れるようになるのは8時頃になるだろう。一旦、他の舟揚場を捜して留吉の沢方向に向かうことにする。辺りには釣り人が誰もいないので、狙いの岩にはいつでもあがれるだろう。

漁師の話に耳を傾けながら

途中の舟揚場で腰を落ち着ける。波が比較的治まっているところは先日の台風で引きちぎられた海藻が漂っているのか、道糸に相変わらず絡み付く。それでもその流れ海藻の中に紛れて25cm程のカジカがやって来た。

コンブ拾いの漁師が海を眺めている。コンブがどこに溜まっているかを伺っているのだ

ろう。舟揚場に3名ほどが集まって話し始めた。私にも話し掛けてくるので釣りに集中できない。収入は昆布が中心であるが、磯舟で採るのは漁期が決められた一時期だけであり、主流は流れ昆布なのだ。昔は魚もたくさん捕れたのだが、最近魚がいなくなったと嘆く。夏の一時期だけサケ漁で賑わうらしい。

私が投げている方向から流れ昆布が掛かってくる。そこは、流れ昆布がよく溜まる場所なので、堰（せき：漁船が出て行く深み）に向かって投げろと言う。堰には日常自分たちが食べるために籠を仕掛けておくのだが、アブラコがよく入るとも言う。

波が高い。沖では5mもありそんな波が岩にあたって砕け散っている。漁師の話では釣り人が危険を顧みず、岩の先端に出て行きよく流されているということだ。先日もずぶ濡れになった釣り人を見たがやっぱり流されたという。己のこととして慎重にも慎重を期したい。（帰宅後の新聞には襟裳岬で釣り人が行方不明という記事が載っていた）。

ご婦人方も多数集まってきて辺りが一層騒がしくなり、6時の時報とともに海に向かって一斉に駆けだした。竿を出している舟揚場右方向の流れ昆布の溜まっている所で釣を使いながら拾い集めていく。そして、紐で括って束になった昆布を防潮堤脇に置いてからまた同じところに向かって行く。

その喧噪を横目にしながらもようやくハゴトコ25cmが上がってきた。続けてアブラコ35cm、さらにアブラコ30cmが来て、一応2魚種5匹が揃った。

潮が少し引いてきたので始めに入った舟揚場に戻ることにする。私が狙いとする岩もそろそろ乗れるようになってきているだろう。向かう途中、例のセントバーナードが昆布の番をしているのか、トラックの荷台の上にいる。周りに昆布取りの漁師がいるせいなのかおとなしいが、繋がれているのだろうかと思心配になる。

7時、東歌別の舟揚場に戻ると、狙いとしていた岩の前に3名の釣り人が潮待ちしている。ここを発つ時は釣り人の姿が全く見えなかったのにどこからやってきたのだろうか。またまた、荷物を担いで戻ることになる。セントバーナードは相変わらず無関心さを装い音無である。東歌別の前浜いっぱいに出てきた岩を頼りにストックで海底を突きながら乗



れる場所を探して歩くが、結局、留吉の沢にまで戻ってしまった。

遠くの方で島氏が見える。その向こうは大前氏だろう。大きな高い岩盤の上で小樽名人会のメンバーが4人並んで竿を出していたので釣果を聞くが芳しくない。あちこちと彷徨^{うろつ}ついていると瞬間に時間が経ち、辺り一面の岩盤はどこでも乗れるようになった

てきた。沖では波がかなり高いのだが、幾重にも張り出した岩盤に当たって磯際は平穏なのである。9時、ようやく設定完了、残り2時間である。

漁師の話に嘘はない、

そこからカジカ、カジカ、アブラコと来た。ハゴトコも混じりながら間断なくアタリは続くが今一大物は来ない。

暗いうちに話し掛けてきた漁師が昆布拾いにやって来て、どうだったと聞く。小物ばかりだがかなりの量の魚を入れたフラシを引っ張り上げて、「もう少し沖に投げられないか。お前の投げているところは昆布の中だぞ。もう少し沖の昆布のない所に投げると深みがあって魚がいるんだがなあ。」と私が思い描いているのとは反対のことを言う。昆布の中にこそ大アブラコがいると確信しているのだが……。この場所では漁師の言うことを聞いた方が良さそうだと、すこし前の岩に移動し、昆布のない深みに投げてみる。

10時30分、アブラコの40cm程のものが来た。やはり、地元の漁師の言うことが本当なのか。しかし、時間がない。今が一番潮が引いてこれからだと言うときに……。10:40に片づけ始める。帰る途中またまた先程の漁師と出会ってしまった。バスに乗り遅れないようにと歩を進めるのだが、一緒に歩きながら話し掛けてくる。そして最後に「夏にサケ釣りに来い。俺の家に泊めてやるぞ。舟にも乗せてやるぞ。」と言う。名前を伺うと、〇〇ゾウだと言うが最初の文字が「す」なのか「し」なのか分からないので確かめた。スエゾウ（末蔵）と言っているらしい。姓を聞くと東歌別にはたくさんある苗字だそうだが思い出せない。兄弟はと聞くとたくさんいると言う。末っ子なのだろう。しかし、弟や妹もいると言うから、その名前はおそらく留蔵や留子あたりだろうと想像する。これで「留吉の沢」の由来も解けたような気がする。

帰りの昇り坂ではセントバーナードがうるさく吠える。トラックの上ではあんなにおとなしかったのに……。やっとの思いでバス停に着き、ガードレールの上に荷物を置いた途端にバスが来た。

審査結果は

審査結果

優 勝	吉井 博	1085点	(アブラコ ㎓+カジカ ㎓+ g)	
準優 勝	鹿島釣狂	1075点	(アブラコ412㎓+カジカ 315㎓+3480g)	東 歌 別
3 位	前野達志	1057点	(アブラコ ㎓+カジカ ㎓+ g)	
4 位	堀内正博	1017点	(アブラコ ㎓+カジカ ㎓+ g)	
5 位	大前健治	871点	(アブラコ ㎓+カジカ ㎓+ g)	

であった。

次の日、魚を全て職場に持って行く。勤務後は前回と同じように魚の行き先も決まって、バツカンも綺麗に洗って片づけてあった。翌日の、「ごちそうさま」の言葉でさらに次回の大物を約束するのである。

【つれづれ】

○小用のために立ち寄ったコンビニで見知らぬ御仁から「鹿島さんですか。いつも『北海道のつり』で記事を読ませていただいています。」と声を掛けられた。お名前を伺うと、小樽名人会の小関氏である。「北海道のつり」に掲載された写真で分かったという。写真が載ったのはもうかれこれ3年前になるのだが、よく覚えておられたものだ。

○大前氏がやって来た。まだ1匹も釣れておらず、エサも流されたと言う。私には提供できるほどのエサを持ち合わせてはいない。しかし、大前氏の言葉とは裏腹に審査ではしっかり釣ってきている。流したはずのエサはどうなったのだろう。

○東歌別にバスが来たのは11時10分。エリモ岬港からどの様にして10分で来られたのだろう。

○ハゴトコは開きにして網で干す。こうすればこの魚もおいしく食べられる。

○「北海道のつり」が職場に送られてきた。私が鹿島釣狂であることを職場で知っている者がいて、早速、記事が紹介された。

